

県立高等学校教育課程課題研究（国語）

－資質・能力の育成を目指した領域ごとの評価について－

平成30年に改訂された学習指導要領において、育成を目指す資質・能力が三つの柱で整理され、それに伴って観点別学習状況の評価について、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の三つの観点に整理された。そこで、本研究では、「主体的に学習に取り組む態度」を見取ることができるパフォーマンス課題の開発と、「思考・判断・表現」を見取ることができる考查問題の開発に取り組んだ。教員の「評価疲れ」を防ぐために、効率のよい評価方法を研究し、各学校の実情に合わせて活用できる実践例を示した。

<検索用キーワード> 高等学校国語科 パフォーマンス課題 考查 評価

運営委員長

愛知県立豊田北高等学校長 河合 龍二（令和4年度）

運営副委員長

愛知県立千種高等学校教頭 渡辺 英樹（令和4年度）

運営委員

高等学校教育課指導主事 大河 靖知（令和4年度）

高等学校教育課指導主事 亀田 篤（令和4年度）

高等学校教育課指導主事 谷川 翼（令和4年度）

研究員

愛知県立瑞陵高等学校教諭 西本 花織（令和4年度）

愛知県立松蔭高等学校教諭 富田めぐみ（令和4年度）

愛知県立瀬戸工科高等学校教諭 水野 司麻（令和4年度）

愛知県立春日井高等学校教諭 霜鳥 誠（令和4年度）

愛知県立高蔵寺高等学校教諭 川野 恭一（令和4年度）

愛知県立岡崎西高等学校教諭 有馬 彰吾（令和4年度）

愛知県立安城高等学校教諭 土屋 豊樹（令和4年度）

愛知県立鶴城丘高等学校教諭 石川 彩（令和4年度）

愛知県立高浜高等学校教諭 渡邊 友章（令和4年度）

愛知県立豊橋西高等学校教諭 西村 光剛（令和4年度）

愛知県立豊橋商業高等学校教諭 高須 伸吾（令和4年度）

愛知県立御津高等学校教諭 細澤 美沙（令和4年度）

総合教育センター研究指導主事 三浦千加子（令和4年度主務者）

1 はじめに

平成30年に改訂された高等学校学習指導要領が今年度から年次進行で実施されている。今回の改訂では、育成を目指す資質・能力が三つの柱で整理され、各教科の目標もそれに合わせて、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理された。さらに、国語科では、「現代の国語」「言語文化」「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」という六つの科目が設定されており、実施に向けてはそれらの科目の特性を十分に理解しておく必要がある。特に、「現代の国語」においては「話すこと・聞くこと」と「書くこと」の授業時数が「読むこと」を上回って設定されており、その他の科目についても、各領域における授業時数が示された。このことは領域ごとの指導が資質・能力の育成に直結することを表している。こうした状況を踏まえて本研究会では領域ごとに異なった主眼を置き、「主体的・対話的で深い学び」を具現化することができるような授業を研究した。また、その評価についても「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」という観点別学習状況の評価の在り方と評価を指導に生かすことができるようPDCAサイクルを回していく指導と評価の一体化についても研究を進めてきた。

今年度は特に観点別学習状況の評価について、「主体的に学習に取り組む態度」を見取ることができるパフォーマンス課題を開発し、その評価の在り方についてルーブリックを作成するなど具体的な方法の研究を行った。また、考査問題の開発についても研究し、「思考・判断・表現」を効率よく見取ることができるよう、考査問題の特性を生かした評価について、何度も研究協議を重ね、研究成果につなげた。

2 研究の目的

観点別学習状況の評価を適切に、かつ教員の「評価疲れ」を起こさないよう効率的に実施するための評価方法を提案することが目的である。特に授業内ではパフォーマンス課題を通して「主体的に学習に取り組む態度」の評価をどのように行うか、考査問題については「思考・判断・表現」を見取るためにはどのような問題を作成すればよいのかについて研究した。また、本研究会では単元案の充実を従来から大切にしてきた伝統を踏まえ、パフォーマンス課題を設定する上で、「主体的・対話的で深い学び」を具現化するための指導について、その単元構想を「指導と評価の計画」として提案した。

3 研究の方法

- (1) 観点別学習状況の評価について、パフォーマンス課題と考査の二つの班に分け、その評価の方法について検討した。パフォーマンス課題を開発する班は、更に領域別に三つのグループに分け、ペアで指導計画・パフォーマンス課題の開発・評価方法ルーブリックの検討を行った。考査問題を開発する班も、領域別に三つのグループに分け、指導計画・パフォーマンス課題・評価方法の流れを検討した上で、考査問題の開発と採点基準を検討した。
- (2) パフォーマンス課題は実際に授業内で扱い、考査問題も実際に考査で出題した。研究協議会でそれぞれの実践報告を基に課題について全体で協議し、研究の充実を図った。

4 研究の内容

- (1) 「話すこと・聞くこと」の授業研究〈構成を工夫しながらスピーチをしよう〉

「現代の国語」において「スマートフォンを持ち始める中学生にメディア・リテラシーについて考えてもらうためのスピーチを行う」というパフォーマンス課題を設定した。観点別学習状況の評価の三つの観点のうち「思考・判断・表現」については、指導事項(1)のイ(構成の検討)を基にルーブリックを定めた。スピーチは4人班の中でのグループ内発表とし、スピーチ原稿についてはルーブリックを用いて分析することで評価を行った。また、「主体的に学習に取り組む態度」は粘り強さの側面と学習の調整の側面を分けてルーブリックを設定した。スピーチの様子と他者のスピーチを基に改善しようとする様子を分析し、評価を行った。他の担当教員ともルーブリックを共有することで、同一に近い基準で評価することにつながった。妥当性と信頼性を保ちつつ、効率を考慮した評価の方法について提案した。

(2) 「書くこと」の授業研究〈翻案小説を書こう〉

「文学国語」における「書くこと」の指導では、「読み手を意識した独創的な文章」を書くことが求められる。本単元では寓話を翻案した、佐野洋子「ありときりぎりす」の分析から始め、他の物語の骨子を借用しながら視点や構成を工夫し、原作とは異なる寓意的な解釈ができる作品に書き換える活動を行った。「主体的・対話的で深い学び」となるように、第1次、第2次ではペアワークなどの活動を多く取り入れ、第3次では他者の作品を読ませて相互評価を行った上で自己評価を行った。本実践の観点別学習状況の評価では、「思考・判断・表現」の評価に生徒同士の相互評価を取り入れること、「思考・判断・表現」の評価と「主体的に学習に取り組む態度」の評価を同時に行うこと、の二点を試みた。振り返りにはICT機器を利用し、自由記述欄の他に、選択肢から選んで答えるものを併用して行った。

(3) 「読むこと」の授業研究〈自分の考えを意見文にまとめよう〉

「論理国語」における「読むこと」の指導を想定し、「自分の考えを深める」ことを目標に、指導事項(1)の力を評価規準に定めて実践を行った。「多様な論点や異なる価値観と結び付け」るために調べ学習を行い、自分の考えを意見文にまとめ、相互評価を行った。さらに、振り返りで相互評価による気づきをまとめさせることで、「自分の考えを深める」ことにつなげた。「主体的に学習に取り組む態度」は調べ学習への取組と振り返りから評価した。この評価が生徒自身の内省的な振り返りをもたらし、どのような学びを得られたかを明確に気付かせる機会となった。課題としては、目標に向けた振り返りができるよう指示の仕方に留意する点と、評価のために膨大な量の振り返りを読むことが必要となる点である。本発表ではこの具体的な改善案についても提案した。

(4) 「話すこと・聞くこと」の考查研究〈話し合いの仕方や結論の出し方を工夫しよう〉

「現代の国語」における「話すこと・聞くこと」の領域において、「思考・判断・表現」を考查で評価するために、自分の立場を明確にした上で、話し合いの状況に応じて表現を工夫したり、進行の過程や結論の出し方を工夫したりする力を測る考查問題を作成した。まず、話し合いを進行する際の「自分の立場や考えを明確にすること」を問う問題を設定し、次に「相手の反応を見ながら表現を工夫すること」を問う問題で、遠慮気味に返答したDさんへの配慮を考えさせた。そして、「論点を共有しながら、話し合いの状況に応じて、進行や結論の出し方を工夫すること」を問う問題を設定し、Bさんが意見を変えた状況や理由について把握しようとする想像力や、他者の意見を調整し、結論に導くための表現力を測ることができた。

(5) 「書くこと」の考查研究〈表現の工夫をしよう〉

「言語文化」における「書くこと」の領域において、本単元では、「自分の体験や思いが効果的に伝わるよう、文章の種類、構成、展開や、文体、描写、語句などの表現の仕方を工夫することができる」という単元目標を設定し、授業展開、並びに考査とその評価を考察した。授業では、『枕草子』「はしたなきもの」の表現上の工夫と、それによって得られる効果を学び、その上で「はしたなきもの」に倣って随筆をつくった。考査では、「はしたなきもの」に倣って執筆したAさんの随筆を示し、「表現したいことを明確にする力」を問う「Aさんの随筆のタイトルを答える問題」と、「表現の仕方を工夫する力」を問う「Aさんの表現上の工夫とその効果を答える問題」の2問を出題した。パフォーマンス課題では測ることができない側面を見取る考査問題の開発に取り組んだ。

(6) 「読むこと」の考査研究〈和歌の内容について読み取ろう〉

本研究は「言語文化」「読むこと」の「作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈することができる」を単元の目標とし、内容を理解し、解釈する力とそれを踏まえて表現する力を測る考査問題の作成を行った。授業で男の詠んだ「筒井筒〜」(『伊勢物語』)の和歌の解釈をグループで取り組ませ、ルーブリックを用いて相互評価をさせた。そこで、考査では女の詠んだ「くらべこし〜」の和歌について、本文の内容を踏まえつつ、和歌に詠まれた女の心情を自分の言葉で説明させる問題を設定した。考査問題の作成に当たっては、「思考・判断・表現」の観点全てを踏まえることや、問いが曖昧になり、解答が主観的になってしまうことなどが課題となった。本研究を通じて、身に付けさせたい力を測る適切な考査問題の作成方法と持続可能な評価方法の検討材料を提案した。

5 研究のまとめと今後の課題

今回の研究は、観点別学習状況の評価について特に各学校が課題と感じているであろう「主体的に学習に取り組む態度」を見取るためにはどのようにすればよいかということに端を発している。単元の目標に沿った力を育成するために、取り組ませるに適したパフォーマンス課題の開発と、パフォーマンス課題を通して「思考・判断・表現」だけでなく「主体的に学習に取り組む態度」を効率よく評価するためのルーブリックを提案した。

また、考査問題で「思考・判断・表現」を評価することができることを目指したが、その際、単元の指導目標や評価規準に常に戻るよう心がけつつ、効率よく評価できるような問題を提案した。

必修科目については、各学校の観点別学習状況の評価の状況について、情報を集め、今後の研究に生かしたい。また、今回提案した「文学国語」と「論理国語」については、次年度以降の実施となる。更に実践を積み重ね、研究していきたい。

6 おわりに

新学習指導要領の実施に伴い、観点別学習状況の評価については評定への総括を行うことが示され、学校では評価の在り方に関心が集まっている。本研究会では評価の場を精選し、適切に行いながらも効率よく評価することが重要として、効率のよい評価方法を研究してきた。この評価は指導や学習の改善につながることを肝要であり、評価のために教員が疲弊することは防がなければならない。本研究が多くの学校における効率のよい学習評価のための足がかりとなることを期待したい。